

は し が き

学校長 卯野隆二

わが国における高度の科学文明の発達と経済成長等が、物質的な豊かさと便利さをもたらした一方で、多くの社会病理現象を生んでいることは周知の通りである。教育の荒廃と呼ばれる諸問題も、非人間的な高度産業社会、競争社会の歪みの所産であり、多くの教師は教育基本法の理念とその達成を阻害する社会病理との狭間で苦悩しているのが現状であろう。

去る8月7日発表された臨時教育審議会の第四次（最終）答申は、現代を新しい国際化、情報化、成熟化の時代への転換期と位置づけ、今次の改革が明治の近代学校制度の導入と戦後の教育改革に匹敵する画期的な意義をもつものとの認識に立って、必要な改革の方策を提言したと述べている。

これらの提言が今後どのように実現されるかは定かではないが、前記社会病理の克服へ向けて、早急に強力に機能するよう念願するものである。

もとより、私達教師が、教育の荒廃と関連して教師への国民的信頼が失われ、その責任が厳しく問われている現状を謙虚に受け止め、教育の専門としての職責の重大性を自覚して不断の研鑽に努めるべきであることはいうまでもない。

本紀要は、本校教官の高校教育に関する理論的、実証的研究の成果を公表し、大方の御批判を得て一層の発展を期するもので、本号には以下の4論文が掲載されている。

高橋教官（社会科）は、自然地理において近年重視されてきた環境の内容が余りにも専門研究の動向に左右されているため、地理を暗記科目とする答えが定着し学習意欲が減殺されているという現状把握から、環境としての自然の総合性、可逆性を重視した教材構成を試案として提示している。

榎田教官（理科）は、酸・塩基の滴定曲線を描くために電離度を用いると滴定の全範囲に同一の計算方法が適用できること、及び、この方法によっていろいろな酸・塩基・塩の組み合わせによる滴定曲線を作成出来ることを見出し、それをシュミレートするソフトを開発したもので、理科教育におけるCAIとしてのコンピュータ利用に資せんとするものである。

西野教官（英語科）は、同一テストを、4年間にわたって第一学年の同時期に実施した成績の比較と、同一生徒に対して約2年間に5回追跡実施して得られた成績の推移の両面から、問題の難易性のポイントを指導方法と関連づけて分析している。

最後に、亀田教官（保健体育科）は、学校教育のみならず国民的課題とされている体力問題を取り上げ、17年間における本校女子生徒の体力診断テストの年次の推移を概観し、さらに本年度在籍女子生徒の体力診断テスト得点によるグループ別に、出生時からの生活調査成績との関連を追求しようと試みたものである。

以上はいずれも多忙な日常勤務の中でまとめられたものであり、問題点も多々あることと思われる。忌憚のない御意見、御教示を賜わるようお願いする次第である。